

校友会報

第 1 2 号

昭和 4 2 年 1 2 月 2 0 日

日本大学工学部校友会

福島県郡山市田村町徳定
電話 郡山 ② 1 5 6 3 番

発行人 半 沢 忠

編集人 武 藤 貞 泰

挨拶

日本大学工学部長 広 川 友 雄



郡山に日本大学が専門部工科を移設してからやがて21年になろうとしている。この間、思えば幾度もの紆余曲折を経て、今日までの道は平坦なものではなかつた。しかし今に見る郡山学園のたゞずまいは、その間一貫して流れて来た、古田会頭横地学部長の陣頭に立つ

た御指導、御施策を始め、その他多くの方々の努力、精進、又この地に学び、この地より巣立って行き、今や日本の、又世界の各地で活躍してられる卒業生の諸君の母校愛、それ等すべての結集の賜でありまして今横地先生の急逝の後をうけて工学部の学部長を仰せつかつた私と致しましては、誠にもつたいない気持ちで一杯であります。

開設当時、学生と共に作った手製の装置で実験を行い、風の強い日には声も届きかねる教室で、冬には角火鉢をかこんでの講義など思い出はつきませんが、今や 5,807名の卒業生を世に送り出し、工業立国日本の一翼に完全な地歩を築いたわが工学部の今後のあり方について、重い責任を以て諸事に対処してゆかねばなりません。それには郡山学園の教職員学生の一致した努力が必要なのは勿論であります。卒業生の諸君にも真心のこもった御援助を期したく希う次第です。

さてこゝで、先日学生の発行している新聞「あかしや」に載せられました私の考えの一端をふりかえってみます。

工学部の教育の目標は工業技術者としての能力に優れていることは勿論であるが、人物、体力共にすぐれた者になるだけ多く、早く世に送り出し、日本の工業力の進展にできるだけ貢献するにあるのは当然であります。日本人には幸い自然科学的能力という優れた遺産が先祖から受け継がれており、これを存分に伸

ばし、現実のものにすることが私共の勤めであるともいえましょう。この遺産の如何に優れているかは戦勝国でありながら、このような遺産を持っていないために、戦敗国である日本のその後の隆盛にはるかに及ばない国が多々あるのをみても判ることでありましょう。諸君が今ものにしたその能力は諸君自身のためのものであるだけでなく、我が国のためには宝物でありますので、これを今後もできるだけ大事に育て、日本の盛運をできるだけ持ち上げて次の世代にゆづり渡してゆくことが、諸君に期待されているところであります。工業技術界は日進月歩であり、又人各々その寿命がありますので、常に努力して自らを新たにし、精進してゆかないと、いつの間にか取り残されてしまうであります。

若い諸君にはこんなことをいうのは早いかも知れませんが、死に面して何等人のために役立つていなかった自分を見出すようではこんな不幸なことではないが、一方我ながら誉めてやりたくなる程仕事をしたと自覚できればこんな幸福な人生はないと思います。

先日学校からの帰りに一年生と語りながら帰つたときのことですが、十年近く以前に郡山を卒業したその学生の兄が、「郡山は校舎はとてもきたないが、その環境、雰囲気は非常によいから是非そこで勉強するように」と強くすすめられて覚悟して来た。入学式には兄も共に来たのだが、校舎等整備されているのに驚き戸迷いながらも大変喜んでいと話して呉れました。

正門近くの森はそのまゝであるし、運動場もまだまだ広く残っていて、昔の雰囲気はスマートさの中に残っているの古い卒業生の諸君も時には帰つて来て、母校の進展振りを追うと共に懐旧談に時を過ごし、かつ在學生によき助言と刺戟とを与えられるよう希望致します。更に又、郡山の母校のことについて気附かれたことは何なりとお知らせ頂き度く、共に共にその発展に努力致したいものと考えます。

(筆者は日本大学工学部長・一般教育科教授・理博)

欧米各国の視察を終えて

日本大学助教授 谷 川 正 己

時差のはなし

3ヶ月間の海外出張には2つの目的があつた。

約1ヶ月間のヨーロッパ諸国の巡歴は、私が講義している西洋建築史上重要な建築を、実際にこの目で確かめたい欲求であり、後の2ヶ月間はアメリカ合衆国に滞在して、フランク、ロイド、ライトの建築を研究する目的とであつた。

7月22日羽田を發つてヨーロッパに行き、大西洋を飛んでアメリカ合衆国へ、更に太平洋を飛んで羽田に帰着したのは10月16日だつた。3ヶ月で丁度地球をひとまわりして来たことになるが、西へ西へと進むコースをとつたため、1日が25時間にも26時間にも、最も長い日は30時間の日さえ体験した。得をしたのか、損をしたのか、いまもつて解らない。時差の関係で、太陽を追掛けるように飛行機が飛ぶので、仲々日が暮れないことが多かつた。

羽田を發つて、最初の目的地であるイランのテヘランに着いた時、私の時計は午前7時を指していたのに時差が6時間もあるということで、真夜中の1時に針を戻さねばならなかつた。ホテルに着いたら『もう遅いから早くお休み下さい。』何のことはない、飛行機のなかで徹夜してしまつたのである。早速もう一度ベットにもぐり込んで寝なおしである。こんな無茶苦茶な生活で、これから3ヶ月間大丈夫だろうかといささか心配したことだつた。

時差といえばアメリカ合衆国で、しばしばこんなことを経験した。例えばピッツバーグを10時の飛行機で飛びたつて、シカゴに着いた時刻がやはり10時。いくら飛行機が速いといつても、時間が掛からないわけではない。丁度1時間飛んでいたのだが、時差の違いでこんなことになるのだ。まことにアメリカ合衆国は大国である。ハワイやアラスカを別として、本国だけでも4つの時間帯に別れている。東海岸のニューヨークと西海岸のサンフランシスコとは、いつも3時間の時差がある。だからテレビでも時報で『只今0時です』とは言えないわけだ。フットボールや野球の実況中継だつたりすると、もうとつぷり日が暮れてしまつたニューヨークで、太陽が燦々と輝やくロスアンゼルススの試合を見るといった具合である。

『お前は、24時間より長い日を経験して来たのだから、得をした』などと仰言るな。時々得をしたような日があつた。しかし最後のところで過不足なく埋め合わされてしまつたのだ。ホノルル空港を出發したのは

10月15日の午後4時だつた。8時間で一気に太平洋を飛び越えて羽田に着いたのは16日の午後7時だつた。日付変更線を通つたために、私の人生で1967年の10月15日は夕方打ちきり、そして16日の大半は無くなつてしまつていたのだ。8時間の飛行で午後7時に着くのはおかしいつて？ いや私の時計はハワイ時間の真夜中12時だつたのに、東京の出迎えの人がみんな午後7時だと仰言つたのだ。つまり5時間の時差があつたのですな。

日本語と日本

夏季休暇中の旅行だつたためか、ヨーロッパでもアメリカでも、日本人旅行者に非常に多く出会つた。出発前、支那人と間違えられることがよくあると聞かされていたが、一度も間違えられたことはなかつた。それほどに日本人の海外旅行者が多いのである。

ヨーロッパのあちこちで『コンニチワ』と挨拶された。イタリーでは観光客相手の商人が、絵はがきやスライドを売りに寄つて来る。『スライド、ゴヒヤクエン、ノー、タカイ』日本語である。それにしても、ノー、タカイは一寸変だ。『ヤスイ』という日本語を覚えた方がよさそうなのにと思つた。多分、日本人の観光客が『そりや高いよ』と値切つたために「ノー、タカイ」という日本語が生れたのだろう。

オランダのアムステルダム空港で、出入国管理の役人にパスポートを見せたら『コンニチワ』と来た。パスポートを見終わると『サヨナラ』といつて手を振つた。今にヨーロッパは日本語で旅行出来ることになるのじゃないかと思つた。

もつと驚いたのは、シカゴ大学の構内で掃除をしていた黒人に呼びとめられた時だつた。『コンニチワ、イイオテンキデスネ。』立派な日本語である。彼は仕事の手を休め、『アナタ、オドロイテルネ。』『？』『ワタシ、アツギニサンネンイマシタ。ソノトキ、ニホンゴオボエマシタ。』彼は兵隊で神奈川県厚木基地に3年もいたのだつた。

日本語は喋らなくても、日本に対する関心はどこでも非常に強い。『貴方は日本人か？』『イエス』『東京から来たのか？』『ノー東京から北へ200哩、郡山というところに住んでいる。』こんな会話を何度交わしたかわからない。西ドイツで会つたおじいさんは例の貴方は日本人か？』と話し掛けて来た。『私の息子も今、日本へ行つている。エーツとどこだつたつて。ああ思い出した、日本のコーリア』その程度に日

本は理解されている。東方見聞録以来、未だ日本はヨーロッパ人にとっては、遠い遠いユートピアであるらしい。

アメリカ人から『貴方の国で、もし気に入らない人物に出会ったら、腰の刀を抜いて、バッサリとやるか?』と質問されたときには、すくなくギョツとした。そういえばヨーロッパの各都市でも、アメリカでも、日本映画は絶えず上映されていたし、黒沢明の名前は可成りの人に知られていたつけ。

ライトの作品を求めて

こんなことばかり書いていると、何を勉強しに行つたのだ?とお叱りを受けそうだから、話題を変えよう

私の主たる研究目標は、今は亡きアメリカの近代建築の巨匠フランク・ロイド・ライトの作品に接し、又彼の弟子達に会い、更には彼地のライト研究家に会うことだつた。そして一口にいつて、それらの目的は予想外に達し得たと喜んでいる。ライトといえば直ぐ飛行機のライト兄弟を連想される人も多からうが、私のいうライトは建築家である。彼は400近い作品を遺しながら、アメリカ合衆国で殆んどの仕事をし、国外では日本とカナダに数点の建築しか作らなかつた。日本では有名な帝国ホテルの他、目白の自由学園、そして芦屋の山邑邸を遺すだけである。どうしてもアメリカ合衆国を走り廻らないことには、彼の作品を見ることが出来ないのである。

ニューヨークに半月、シカゴ近郊のオーク・パークに1ヶ月、そして砂漠地方と西海岸に半月住んで、出来るだけ多くのライトの作品を見学することに努めた。その結果恐らく100を超える、従つて、彼の代表作品と見做されている重要な作品は殆んど見学することが出来たと思つている。

わけでも、強烈な印象として私の頭に残っていることは、両タリアセンでの歓待であつた。タリアセンというのは、ライトの設計事務所兼建築学校のことであ

るが、自給自足の彼らは、夏はウイスコンシン州のスプリング・グリーンで生活し、冬になるとアリゾナ州のパラダイス・ヴァリーへ大移動するのである。前者をタリアセン・イーストと呼び、後者をタリアセン・ウエストと呼んでいる。この両タリアセンの距離は、日本の北海道の北端から九州南端までの2倍はある。私が訪れたのは9月初旬であつたから、設計活動はタリアセン・イーストで行われていた。幸運にも土曜日に訪れた私は、その夜のライト未亡人主催の晩饗会に招待された。タリアセンでは毎週土・日曜には、こうした晩饗会が開かれている。

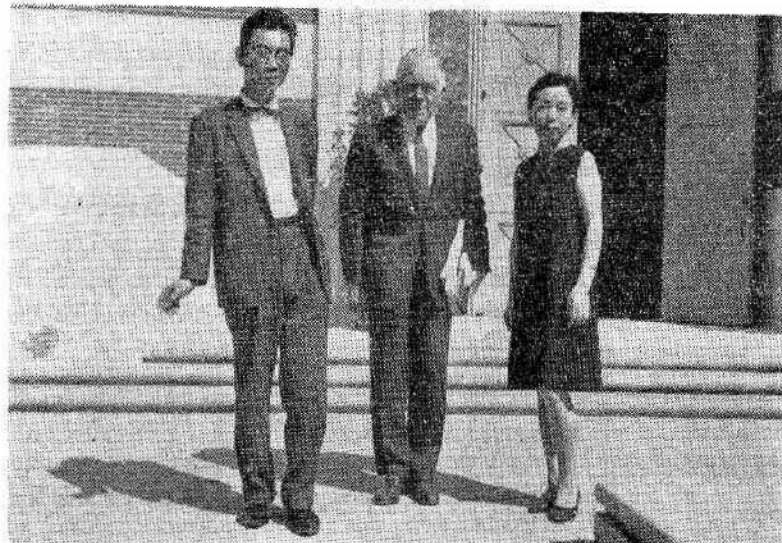
更にタリアセン・ウエストでは、そのゲストルームに泊めていただいて、心おきなく見学することが出来たのだつた。

又、各地のライトの弟子達が、案内役を買つて出てくれて、ニューヨークではターフェル氏、ピッツバーグではベルントン氏、シカゴからミネアポリスまではハウ氏、バートルスビルではブライス氏、更にサンフランシスコではグリーン氏のお世話になつた。

ライトの弟子だけではない。アメリカで活躍中の、ライト研究家、例えばイリノイ大学のブソツ氏、シカゴ市文化財保護委員のベンソン氏、南加大学のマンソン氏、ロサンゼルスのリード氏ら、数えあげればきりが無いほど多くの人々の友情によつて、私のライト研究旅行が達成されたのである。

それらの人々の好意にむくいるためにも、ライト研究の仕事は、強力に推し進めなければならないと、私自身に言い聞かせているのである。

(筆者は工学部建築学科助教授)



【写真説明】

南カルフォルニア大学美術建築学部校舎前にて
左から筆者、グラント、Cマンソン教授
谷川助教授夫人

土木工学的諸問題

青山清道



新潟県はその周囲で富山、長野、群馬、福島、山形の各県と接し、人口約240万人、面積約12,600km²を有する我国第4位の大県で東は山丘地帯、西は日本海に面し、信濃川、阿賀野川が県内を横断し豊富な水量を誇る只見川は豪雪地帯の本県にその源を発している。また本県は、海岸の浸蝕、

地盤沈下、地上り、地震、水害、豪雪等の多発する災害県であり、こうした立地条件のもとにダムの建設、道路の整備、融雪道路の計画、河川の改修、護岸工事、港湾施設の建設整備等の土木事業が急務である以下本県において土木技術者研究者が当面する問題について略述する。

1. 新潟とその周辺の地盤沈下

本地域は元来、信濃川及び阿賀野川により造成された沖積平野で圧密による地盤の収縮は認めざるをえないが水溶性天然ガス採取にとともなる地下水の急激な大量揚水による地盤沈下を生じている。これは新産都市工場誘致に関係する基本的問題で採取規制と平行して地盤沈下を起さないような地下水くみ揚げ方法、即ち地下水を圧入する方法等の研究の促進が望まれる。

2 第3紀層の地じり

本県には約1,000ヶ所の地じり地があり、その面積約100km²、これは数において全国で4/1、面積において1/5を占め全国1の地じり地域である。

地じりを地質的条件によつて第3紀層地じり、破碎帯地じり、温泉地じりの3つの型に分類すると、本県の大部分は第3紀層の中で起っている。従つて第3紀層地じりについて、その機構の解明、予知及び効果的な防止工法等が研究、開発されなければならない。しかるに地じり現象そのものが複雑多岐にわたっており土木、地質、化学等広い分野にわたつての協力体制が要求される。

3. 豪雪

本県は日本の豪雪地帯として知られており、雪がもたらす被害は甚大なものである。昔はこの災害は雪国において免れることの出来ないものとあきらめていたしかし現在、雪害を人力でもって取り除き、進んで雪の恵みを利用し、雪国の生活を文化的に恵まれたもの

にする努力がなされている。長岡市で実施している消雪パイプを例にとつてみると、従来豪雪地帯において市街地の各期間の通行量確保は主として除雪機械と流雪溝によつていた。しかし除雪機械は特別な場合を除き巾員8m以下のところでは使用不可能であり、流雪溝は地形により水路勾配がとれないことがある。長岡市はこれに当面して、地下水をポンプアップして散水し消雪する方法の実施にふみきり成功している。今後問題として散水消雪効果を有効にするために噴出口の形、水源として信濃川の伏流水だけでまかないきれぬかどうか、使用水の排水処理のことなどがある。

4. その他

本年(1967年)開港100年を迎えた新潟港が同年6月1日から我が国16番目の特定重要港湾に日本海側で初めて指定された。今後経済成長に伴う港勢の進展に加え対岸貿易の拠点として、その発展が期待され防波堤、導流堤、岸壁工事等港湾施設の整備、能力の拡充に加え標砂の研究も要望視される。河川についても我が国最長をほこる信濃川が貫流し、その分水工事、有機水銀中毒で一躍クローズアップされた阿賀野川の工場廃液処理、まだ記憶にあたらしい8・28羽越水害で大被害を出した荒川、加治川の治水計画の根本的な再検討及び土石流に対処するための砂防計画もなされなければならない。また1964年6月の新潟地震の際の流砂現象の究明と完全な基礎工事、耐震設計確立への努力も忘れてはならないことである。

以上新潟県で当面する土木工学的諸問題について論求した。私も微力ながらこれらの問題に傾注し地域社会に貢献したいと思う。

(筆者は土木13回卒業後本学大学院理工学研究科修士課程修了現在新潟大学工学部土木工学科勤務元あかしや奨学生)

—連絡先・勤務先の連絡についてお願い—

1. 校友諸兄姉の皆さん、ご自分の住所・勤務先に異動がありましたら、なるべく早く校友会に、ご連絡下さい。校友会の最大の使命は、校友各位との連絡を図ることです。どうぞお忘れなく必ずお願いいたします。
2. 母校や校友会から全然連絡も何もないという校友がおられることを知りましたら、その方の住所なり勤務地なりを報告下さるか、それとも本人にその旨連絡して下さい、何れかの方法でご協力下さい。

大学院の近況について

遠 藤 茂 勝



先日、校友会事務局より会報発行にあたり何か、大学院のことで、研究論文の一端でも、というお話がありました。今年に入り何回か校友の方から手紙が参りまして、現在私がおります大学院の状況について知りたいという事でしたので大学院の近況について、日頃の雑感をまじえながらお

話したいと思います。

最近、全国的に大学入学志願者が増加してきたことも相まって、大学院においても徐々にその傾向が見られるようであります。しかしこれは一方において、社会的な要請もあつて各大学において近年とくに大学院に重きを置きその充実を計っている折から当然の傾向ともいえましょう。

昔、といつてもそれ程以前のことは私達が知るよしもありませんが、おそらく今日よりほんの少し前までは、大学院とはどういう存在であつたのでしょうか。雲の上の存在とは全く無茶な表現であるが、確かに行く人も少く、むしろ行く人があるどころか、その存在さえ殆んど知られていなかったのではないのでしょうか。現在でもまだまだその内容について知られていないのが実状で、いわゆる昔風の陰気なそして薄暗い何かじめじめしたそういったイメージを持っている人達がまだまだ多いことに驚くこともあります。各大学においてその組織の充実を計っている折から、今日ではその大学によつて、あるいはまた専攻によつてもその研究室の雰囲気は異なるにしても、一般に大学院の門も比較的広く開校されるようになり雰囲気も明るく、いわゆる大学の中核ともいふべき大学院研究室を始めとした各研究室では指導教授のもとに日夜研究が行なわれ地道な積み重ねが続けられているのです。しかし、ここにも大学が一般的な傾向として持っているような指導教授陣の不足という問題がなげかれているのは全国的な傾向のようです。しかしこういった全国的な傾向をよそに、大学院の学生数は増加の一途をたどり、現に我々の所でも昨年理工学研究関係で建設(土木建築)機械、物理など、各専攻平均十数名であつたのが今年は約二倍の二十数名にまで増員されてきています。しかしこれでも各専門々々に分けてしまえば平均2～3人といたつた所ではありますが、その年によつては、そ

の専門の人数が、橋梁関係とか土質関係に希望者が集中するようなこともあります。参考までに私のクラス(13名)を各専攻別に分けてみますとだいたい次のようになっています。

専 門	人 員
鉄筋コンクリート	1人
土質工学	3人
海岸工学	1人
水理学	1人
橋梁工学関係	5人
交通工学	1人
都市計画	1人

ところで理工学部、大学院の第一回生が出られたのは昭和29年(修士課程)で当時学生数は5人でありました。その後30年が同じく5人で、31年から以後36年まで2、3人にとどまり37年は好況を反映してか1人もなく続く昭和40年までは2、3人ずつで確かに人数は少なかつたのであります。しかし最近では学生数も増したようであります。

大学院といつても入学当初は、いわゆる大学当時と同様な授業形式があり、ほとんど毎日、特別講義といった形ですが、これは基礎理論を主としたもので各専門とする科目がその個々によつて異なるため今のところ全科目が自分の専門に応じて選択出来るようになっており、その中から必要単位の30単位を修得すればよいことになっているわけです。従つて、1年次ではまだまだ、基礎的な広範囲の知識を身につけるための課程といえるようです。やがて2年次に入りますと授業という授業はほとんど終つてしまい、いわゆる論文のみとなるのですが2年次からは各個々の専門に分かれてそれぞれの専門の指導教授のもとに入り、その先生の指導のもとに一年間研究を進めることになる訳です。普通研究テーマについては各自が自分のテーマについて指導教授に相談して決めることになるのですが一般には大学時代の卒業研究が主体となつて引き続き論文のテーマとなる場合も多く、そういう意味では大学時代の研究も重要であるといえよう。このほかにも指導教授からテーマを与えられる人も何人かいるようですが比較的少いようです。こうして二年に入ると論文のためにまず文献調査から始めるのが普通であります。やがて実験に入り学内の実験室でやるものもあれば民間の研究機関やほかの大学等での実験、研究をするものなど、種々雑多な方法で行なわれています私の場合は、いわゆる専門が海岸工学ということで、

実験を行うにしてもとかく大がかりとなりがちです。最近ある民間会社で海の模型ともいわれた超大型の造波水槽が作られましたが、その規模たるや普通のプールの1コース分以上にも相当する幅と深さを持ち、その水槽長は実に160メートルといったものであります。幸に私もこの水槽を使用して2、3の実験を行いました。が水槽の一端で起こされた波が安定するために要する波のランニングの部分として70~80メートルも必要で決して大きすぎる程のものではないのです。

何しろ米国などでは数百メートルもの実験水槽さえあるといわれ、近年ますますこの分野の研究も進められてきたようであります。こうして二年の終り頃には一通りの実験も終り論文として書き上げられることになるのです。そして研究室の方針やテーマによつて異なりますが研究発表の折ごとに発表され、あるいはまた学会に報告されるものもあるのです。このようにして研

究の主体となる基礎的な理論や実験法などを学んでいくわけです。

そしてつい最近まで、その大半の人達の就職先といえば、大学に留ることで、そのまま自分の研究を続けるという傾向でしたが、今では公官庁や民間会社にも道が開け、比較的就職先も幅広くなりつつあるようです。

今後、ますます拡充される傾向にありますが、現在土木、機械、電気など私達の校友も五名ほど同じ大学院で学んでおります。そして既に来年度入学予定者としての校友もおられるとの事、大変嬉しく思いますがついではながら現在大学院にきている五人の校友共々元気で研究に励んでいることをここに記して結びとしたいと思います。

【筆者】土木科14回卒業 日本大学大学院理工学研究科建設工学専攻 遠藤茂勝

工業化学科の「京浜地区懇親会」を開く

42年3月に15回目の卒業生（工学部としては第1回生）を出し、工業化学科としても500名以上の校友を教えるようになってきた。そのようなことを考えて初めての催しではあるが「京浜地区」の人達だけでも集つて懇親会をもとうと云う話を、1回生の杉原君や4回生の伊藤君などの話題になり、手持ちの名簿なども不確かの人達も多いことから、郡山の学部に残っている2回生の後藤君や3回生の高野君にその連絡事務を頼もうと云うことになり、「日本大学工学部工業化学科校友・京浜地区懇親会」が開かれることになった。

該当者310名にアンケートの手紙を出し、そのうち90名近くの出席予定者を得て、「懇親会は」7月28日の夕方から文京区の私立学校教職員共済組合湯島会館で行なわれた。

当日の参加者は恩師の篠崎平馬先生と高木昭先生を初めとして、会員78名の盛会であつた。（片山先生と宇野原先生は校用で村上先生、橋本先生は私用で出席できなかつた。）

特に1回生の岡村次雄、岡村公介、高坂彬夫、杉原潤、松浦定治の5君は「工業化学科の伝統の礎を作るのは僕らなんだ、と云う意気込みで、学生時代も社会人になつてからも頑張つてきた。やはりよき伝統の

とに集つてくる下級生達が、どんどん僕らを追いこして行つてもらいたい」と挨拶し、名古屋からひかり号で往復した特別参加の黒岩君（13回生）などとともに満場の喝采を受けた。

そのうちに名刺の交換が行なわれ、会社社長、専務取締役、工場長、課長、研究室主任等々、10年以上の努力の積み重ねがにじみ出ているような、そしてその重荷をしつかりと自分のものとして、その職責を果しているような光景であつた。

そして今さらながら、郡山の工学部は幼少期ではないんだ。もう青年期なんだ。と云うことをしみじみと味わつた。

最後に校歌を斉唱して、それぞれが二次会(?)へと散つて行つたが、このような会合が、どの科でも、そして全国のあちこちの地区でも行なわれ、会員同志の明日への進歩のため、そして母校のために努力がはられることを願つて止まない。

最後に、この懇親会を開くに当つて、校友会の事務局の人々に少なからずの御足労をお願いし、また校友会からの援助もあつたことも付記いたします。

そして当日使用した「京浜地区名簿」の残部がありますから、校友会の事務局に申し込まれた方におあげ致します。（郵送料15円をお忘れなく） 【T記】

昭和43年度学生募集

- | | |
|---------|------------------------------|
| 1. 募集学科 | 土木工学科・建築学科・機械工学科・電気工学科・工業化学科 |
| 2. 試験科目 | 数学（Ⅰ・ⅡB）理科（物理Bか化学B）英語（B） |
| 3. 試験期日 | 東京出張試験（2月21日） 郡山試験（3月9日） |

日本大学工学部 福島県郡山市田村町

会 員 消 息

☆沖縄で奮闘している校友諸兄

久 高 将 栄 土木4回卒

琉球政府建設局工事部土木設計課 課長

大 城 晃 土木6回卒

琉球政府企画局企画課企画調査官

友 寄 隆 慎 建築6回卒

琉球銀行営繕課調査役

松 本 邦 夫 建築6回卒

琉球列島米国民政府公益事業局
土木建築部構造担当主任

桃 原 隆 建築6回卒

琉球政府建設局土木建築部
建築課建築調査官

仲 村 将 市 化学10回卒

琉球政府通産局工業課鋳業係長

以上の6名の校友について、桃原隆さんから報告いただいたのですが、前会報11号に「沖縄だより」として掲載したものの続きであります。

(なお沖縄方面に活躍している校友はこの他にたくさんおりますことを付け加えておきます。)

☆ 短 信

片 岡 孝 三 土木6回卒

拝啓 秋も深まり、背後の山々には雪も見え始めたのではないかと思います。近況によれば、母校の発展改名等々大慶に存じます。

小生、この度、命により運輸省港湾局を辞し、新東京国際空港公団に勤務することになりました。新聞、週刊誌等で色々と御存じとは思いますが、我々にとっては今が仕事の山場、毎日仕事に追いまわられています。

ところで、お願いですが、東京在住の同学の志と連絡をとりたいと思いますが、住所録がなくて困っております。余部がありましたら一部お送り願います。右お願いまで (42.10.16)

島 田 宏 建築6回卒

平素はなにかとお世話さまになりながら、ごぶさたいたして居りますことをお許し下さい。

秋風も立ちはじめました先月14日、6年間住みなれました三鷹より、左へ転居いたしました。

三宝寺を囲む石神井公園の近く、空気がさわやかな所で御座います。是非お出かけ下さいます様お待ちしております。 (42.10.2)

三 須 光 機械10回卒

残暑酷しき折柄、皆々様益々御健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、今度結婚のため左記に住所変更しましたのでお知らせします。

現在インド国営のステンレススチール製鉄プラントを担当しており、全て機器はFOB済みで、早く行けば今年末にはホットラン(圧延操業運転)開始の見込みです。

皆様、母校発展のために益々御活躍下さい。

(42.8.12)

平 部 延 幸 機械11回卒

暑中御見舞申し上げます。

校友会報11号を送付頂き有りがとうございました。

久々の会報に在学時代のことを懐しく思い出しました。昨年の12月より現住所及び勤務先を変えました。

連絡遅れて申し訳ありません。よろしく願います。 (42.7.20)

前 島 宏 嘉 電気12回卒

暑中お見舞申し上げます。

いつも校友会報ありがとうございます。

小生第12回電気科卒業ですが、会社及び住所が変りましたのでお知らせ致します。

日立エンジニアリングK.K.に入社致しましたが、今年の2月日立エンジニアリングK.K.の設計部門が日立製作所各工場の、設計へ業務移管が行われましたので私も日立製作所多賀工場へ所属が変りました。仕事は輸出用扇風機の設計を担当しております。

住所は表記の如くですので、今後共よろしく願いいたします。 (42.7.19)

二 井 透 電気13回卒

私は昭和40年日大工学部を卒業し現在、防衛大学校理工学研究科学生として、再び書物を相手の毎日を送っておりますが、思い出多い日本大学工学部のことを忘れたことがなく、年々送付下さる校友会報によつて母校がますます立派に発展を遂げていることを知り、この上ない喜びを感じ、関係の皆様方の努力と信念に感謝の意を禁じえません。 (42.11.10)

広川教授専任の工学部長に就任

日本大学教授、理学博士、広川友雄先生が昭和42年8月18日付をもって、日本大学工学部長に就任されました。新部長としての所信については、本紙巻頭に述べられている通りであります。ここに先生の略歴を記して広く校友各位にお知らせいたします。

大正3年7月17日山口県生れ。

昭和16年3月	広島文理科大学物理学卒業
全 16年4月	広島文理科大学物理学助手
全 17年3月	山梨高等工業学校教授
全 22年6月	日本大学専門部工科専任講師
全 22年9月	日本大学専門部工科教授
全 24年4月	日本大学第二工学部助教授
全 38年1月	日本大学第二工学部教授
全 41年1月	日本大学第二工学部次長
全 41年4月	日本大学東北工業高等学校長兼務
全 42年8月	日本大学工学部長

建設中の新実験棟について

1. 着工 昭和42年8月2日
2. 位置 一号館、校友会の東隣りの区域で、俊英寮への通路に平行して、東西に3棟が並列
3. 工費 3億9千万円
4. 規模 鉄筋3階建3棟 建坪総面積 3,300㎡
5. 各科の設備配置
 第一号棟……一般科・工業化学科
 第二号棟……電気工学科・機械工学科
 第三号棟……土木工学科・建築学科
6. 竣工予定
 第一号棟 昭和43年3月末日
 第二・三号棟 昭和43年5月末日

下記3人の先生方には病魔に侵されご逝去なされました。誠に痛惜の極みであり、謹んで哀悼の意を表するとともに、心から御冥福をお祈りする次第であります。

ここに生前の御労苦と御尽力とに対して、深甚なる感謝を捧げ、あわせて今後の発展に力め、御高恩に報いたい所存であります。

横 地 伊三郎 先生

工学博士 日本大学学長

日本大学理工学部工学部、生産工学部の各部長

昭和42年8月2日 心筋こうそくのため逝去

昭和42年8月11日 正四位勲二等瑞宝章受勲

町 田 保 先生

土木工学科教授

昭和41年4月 日本大学工学部勤務

昭和42年10月12日 逝去

湯 目 董 先生

一般科講師

昭和26年4月 日本大学第二工学部勤務

昭和42年9月27日 逝去



【写真説明】

11月下旬の進行状況 左手前は校友会館

総会のお知らせ

昭和43年度校友会総会を下記により開催いたしますので校友諸兄姉は御出席下さい。

記

日 時 昭和43年4月14日(日) 午後1時

場 所 郡山駅前 明石会館